

会員の の 広場

Member's Open Space



川柳で綴る遊里史 (その4)

●美唄歯科医師会会員
雨田 実

遊里における遊客種々相々、前号では武士、ごいんきょ、若旦那などについて述べたが、今回は、身近なところに話題を移す。

女房はスッポン遊女はお月さま 女房の聞くように読むにせ手紙 柳だの桜だのとて出られやす の句のごとく、ぬかみそくさい女房より華やかに着飾ってサービスしてくれる遊女の魅力に軍配があがることから亭主は、あの手、この手で抜け道をつくって通つたらしい。かくさずとお出と肉儀見ぬくなり 羽織でももう知れますと女房いい といううちは、まだやさしいが、浮かれてる面が見たいと女房いい うちにはない物ではなしと女房いい などとなると、亭主に浴びせる毒舌もすさまじい たしかに女房も同じモノを持っているのだが、行ったのさばかばかしいと肉儀ねる と悟りの境地に達した女房もいたが、土手を行く女房目尻が上がってる などと亭主を追跡する強硬派もいた。女房と土手で会ったが百年目これこそ本当の百年目である。翌朝ともなれば、調法なものジャマなわ女房なり と思ひながら帰宅すると、朝帰りソリヤ始まると両どなり で戦いが始まる。江戸っ子の生まれそこない金をため 百の遊女もすぎやすと伊勢屋いい ケチの代名詞の伊勢屋など江戸っ子の嘲笑の的にしたように、武士の多い江戸は武士の清貧の思想が江戸町民に浸透したことは、たしかにあったといえる。その上火災の多い土地柄故、物欲面に淡泊な江戸っ子気質ができてたともいえる。

遊女の恋

間夫、情夫などと遊女のいい人は呼ばれた。間夫や来るまた寝の床のさがりグモ クモがたれさがあると待ち人が来るという迷信が遊里にはあるが、いちど眼ざめて、また寝ようとした床にクモがさがって来たから恋しい人が来るだろうと、遊女が胸をときめかせている図の句である。歌舞伎の遊女のセリフに「そりやもう間夫は勤めの うさ晴らし」というのがるように。浦里における時次郎。三千歳における直次郎。小紫における白井権八など。遊女が真情を尽くすのが間夫だから、間夫の来る日には営業上の客はジャマ者あつかいされたようである。その代わり、傾城が傾城を買うつらいこと の句のように遊女が間夫のために揚代を払い、自分を買切ること身揚りをしなければならなかった。その他にも、身揚りの夜は借金が生きて見え の句のように楼主が余りうれない遊女や、お茶をひいてばかりいる遊女に身揚りを命じて前借金に加算するケースもあった。また、身揚りの日は亡き父への供えもの 亡き親の命日故に客をとらない律儀な遊女もいたが、傾城が自腹を切るのおもしろさ の句のように遊女が間夫と会うために身揚りするケースが最も多かったという。色男かねど力はなかりけり 惜しいこと間夫を亭主にしてしまい の句もあるが、これを見て吾が意を得たりとこひざを打って感心する向には、いささか心配である。

そうじまい 總仕舞そして落ちぶれた客

一人さえ買い兼ねるのに總仕舞 これはその妓楼の遊女すべて買い切ること莫大な金が必要だった。總仕舞するとカゴ屋痛がこり でカゴ屋にも重さが分かる程の大金が要る遊びだったという。呑ればかり売れぬと遣り手機嫌なり うるさい遣り手も眠尻が下りっぱなし。傾城に埋められている總仕舞 にぎやかな光景が展開されていった、そのバカ遊びの結果、總仕舞やがて家にも札をはり 總仕舞さて親せきは義絶なり 極楽へ花をふらせて火の車 金がなくなって遊女に意見され。みんな無くなると意見のし手がない。遊里に夢中になって落ちぶれてゆく過程をたどってみると以上の如き句がならぶ。

小話。身代を入れあげ、一家いちもんに見捨てられ蕪をかぶって町外れにねている。なじみの遊女これを見て「さてさて、おいたわしや、私故にこのやうなおすがたに」と泣けば、「こりゃ、こりゃ声が高い。かたき打ちに出たのじゃ」といづくろうのが、せめてもの見栄だったという。

西鶴の短編に豪遊の結果落ちぶれた富豪たちの姿を書いたものに、金魚のえさのぼうふら売りにまで落ちぶれた富豪が久しぶりに会った友人に同情されると、遊里にはまって豪遊の末かくなるはさだめなれば、さのみ恥ずかしきことにあらずと全盛期の心意気を失わず言いはなっているあたり流石である。使ってもたためても金は面白い の句のように先代が買いしめ、売りおしみをして世間さまに大変なご迷惑をかけて、ほろもうけをして金をためる面白みを十分に味わったのだから、2代目の自分が使う面白さを十分に味わったうえできれいになくすことで世間さまに申し訳が立つというもの、親孝行にも色々ありますと秋深い寒空にひと衣でふるえながら、うそふいたという紀之國屋文左衛門の二代目というが作り話としても本当かのように聞こえる。

なぜ遊里道楽の末路がこうなるのが当然だったろうか。元禄元年の日本永代蔵には銀五百貫より上を分限といえり、千貫の上を長者といえり千貫より上のふりまわし（遊んでいる金があること）の人は大夫にもあうべしとあるが千貫とは現在の金額に換算すると20億位になる。ありそうでないのが金とは昔も今日も同じであるから、豪遊を続けた場合当然零落の人生が待っていたのであろう。紀文然り。奈良茂然り。

こういう遊興が現代の商取引の得意先の招待のように将来の利益を当てこみ接待費でまかなわれるようなケースは極わずかしかなかつたらしく大部分は商売上の策略などにかかわりなしの遊びそれ自体を目的にした完全消費だったのだからものすごい。タイコ持ち揚げての末のタイコ持ち 唐様に売り家と書く三代目

蛇足。遊客心得

初回、初めての客。最初先ずごらんに入れる煙草盆 何のことはねえ初会は御儀式。初会には器を借すと思ふや。二回目（うら）といい二会目に登楼することを（うらをかえす）という。うらの夜は四・五寸近く来て坐り 三回目（なじみ）二度と行く所ではないと三度行き 三回目には馴染になるので客は、すべてに気くばりが必要になる。第三は婆に一分やりぬらん と金にかかる。三会目はしーぜんのまとなり かごの鳥三度目からは餌づくなり 見なましよ四角ぎますと卵焼きとなって遊女も親密感をしめすようになり、客は骨ぬきになつたりするから、道楽までにして道落にならないようにご用心、ご用心。

道楽会通信としては少々気品に欠けるごとし、のそしりある記事を数回にわたって綴りましたが、今はなき遊里の江戸情緒。大門みかえり柳。これはこれとはばかり花の五丁町のにぎわい。遊女のため息などを彷彿しながら雑学として。可々